

習道書

無題であるが、元能筆受の「申楽談儀」で笛方や狂言方のことを述べた条に「習道書に種々の定あれば、委細書き置かず」とあり、それが本書の内容に該当するから、世阿弥父子の間では「習道書」と呼ばれていたものと思われる。

他の世阿弥論書がいずれも特定の人物に与えるためのものであったのに対し、本書は結崎座（すなわち観世座）所属の技芸者せんたいのための書かれ、注目すべき内容をもつ。

著作年時は永享二年（一四三〇）三月である。その前年、新しく將軍となった義教は、音阿弥元重に愛顧を向け、世阿弥や元雅は冷遇されがちであった。正長二年（一四二九）五月十三日、世阿弥父子は仙洞御所での演能を停止され、永享二年四月、義教の命令で醍醐清滝宮の楽頭職を取りあげられた（後任は音阿弥）。このような状況に絶望したのか、同年十一月、世阿弥の次男元能は能役者をやめ、出家してしまふ。「習道書」がこの年の三月に、座の人たちを対象として書かれたことは、結崎座の前途に強い危機感を抱いた世阿弥が、座員ぜんたいの結束と努力とを要請するためであったかもしれない。

テクストとしては、松廼舎本のほか、観世座第十五代の大夫であった元章によって加注・刊行された明和九年刊本がある。元章は、特に好学の士であったらしく、賀茂真淵などを顧問として、いわゆる明和改正謡本を校刊した。いま観世宗家に蔵される謡本には、元章の筆で細密な書きこみを加えたものが多く、その好学ぶりを示している。もつとも、この明和刊本は、いま江島伊兵衛氏の鴻山文庫に蔵される一本しか残っていない。底本としては松廼舎本を用い、明和刊本で校訂した。

申楽一座人数、其役々習道次第

申楽一座の構成および技芸者各自の研究条項

申楽の一会をなす役人、面々われ一身習得する所を以て、心にまた遠慮を持つべき道あり。一座成就の感風は、連人の曲力和合なくは、道叶ふべからず。連人一同の俱行揃はずは、いかに面々その態をよくよくなすと思ふとも、舞歌平頭の成就是あるべからず。さるほどに、自他融通の道を以て、舞歌をなす心を持つべし。われ一力にて事をなすとは思ふべからず。一座棟梁の習道を本として、その数へそのままに、芸曲をなすべし。その条々。

一、棟梁の為手の役道とは、当座の芸に至りて、楽屋より出でて、橋掛りに立ち休らひて、一声一句を上げて、さて、舞台上出立して、指事より音曲一段謡ひ納むるまでは、為手一人の役なり。たとひ声など不足なりとも、この一声一句の事をなさざらんは、為手にてはあるべからず。もし、その能の出し物によりて、夫婦なんどにて、老男・老女兩人出でて事をなさ

申楽の公演に参加する技芸者たちは、めいめい叩きこんだ腕ながらも、また、心の中に、深い考えをもたなくてはならない筋あいがある。一座の申楽が成功しておもしろく感じさせるのは、座員各自の芸力が融け合わなくては、筋として望めるものではない。座員一同の呼吸がびたりと揃わなければ、どれほどめいめいの技をみごとに発揮したと思つても、舞・謡の揃った出来ばえを得られるものではない。だから、お互いに譲りあい助けあう精神をもつて、舞歌を演ずるよう心がけなくてはならない。自分一人の力で演ずるのだとは思つてはならない。一座のリーダーたる役者の指導を規準として、その示すとおり各自の芸を演じてゆくがよい。その細目は、次に示す。

一、リーダーである役者の任務というのは、演能の場に臨んで、楽屋から登場し、橋掛りで立ちどまって、イッセイ一句を謡い、それから舞台に入つて、サジから始まる一段を謡い切るまでは、その役者一人の受持ちである。たとえ、声などが貧弱だとしても、このイッセイ以下の一くさりやれないようでは、能役者たる資格がない。もしその能の登場人物の関係で、夫婦などになつて、老翁・老嫗の兩人が登場して演ずるときには、二人で謡う

んは、それは然るべし。ただ一人出づべき事に、あるいは為手の芸力も不足、または音声なども叶はねばとて、云はれなき人を連れて、初入門の見風をなすこと、道にはあるべからず。かへすがへす、一身一音一曲の節風を、叶はねばとて、人数を立て、剩さへ下座より同音を謡ふこと、さらにさらに道にはあるまじきなり。諸曲においても、棟梁の為手になることは、上手と許さるる際なり。その究めの目前の証見とは、たとひ音声不足なりとも、即座の曲をなす分力なくは、上手とは云ひ難し。物に上手と申すは、叶はぬ所のことをなすを以て、道に至る為手とは申すべきなり。

さて、それより後は、すでに脇の為手も立ち並び、問答、助音も、一座の人数、平頭の事をなす便りとして、他数に相同じて、惣曲を以て、見聞一座のことをなす心を持つべし。これ、棟梁の道なりとす。その外、論義番ひの声先、為手一人の役なりとす。

という場合があつても、それは構わない。ただ、当然一人でも出るべき能に、あるいは役者本人の技術が拙いとか、あるいは声量なども貧弱だからといって、出る理由のないツレなどを伴つて出て、いかにも初心者めいた風を見せることは、筋の立たないやりかたである。どこまでも本人だけで謡いとおすべき部分を、いくら力が不足だからとはいへ、よけいな人物を登場させ、しかもそのうえ舞台に坐つた者が同音に謡うなどということは、てんでお話にならないやりかたである。どんな芸能においても、リーダーを勤める役者になるというのは、名手として認められる地位に在ることにはかならない。そこまで究められているか否か目の前にはつきり見えるのは、たとえ声量が貧弱であつても、その場に依じておもしろく聞かせてゆくだけの力量で、それが備わっていないとては、名手とは言えない。何事においても、名手と言われる者は、不可能みたいな事でもやつてのけるといので、その道を究めた名手と称することができるのである。

さて、登場謡を謡つた後は、もうワキも参加し、問答や連吟をも、一同が共同してくれるのを利用し、お互いに他の役者と協和して、演技の全体的統一をもつて、視覚的・聴覚的にも皆で成功させるといふ精神でやらなくてはいけない。これが、リーダーたる者の行きかたである。その他、ロンギをかかず時のイニシアテイヴは、シテ一人の責任である。

- 1 われ一身 底本「我一身」、明和本「我一身」。
- 2 連人 底本「連人」、明和本「連人」。明和本の訓に従う。
- 3 思ふとも 底本「おもふ共」、明和本「云とも」。
- 4 成就は 底本「しやうしゆるは」、明和本「成就ハ」。
- 5 われ一力 底本「我一力」、明和本「我一力」。
- 6 一声 シテの登場直後にうたう謡で、七五調の二句（ときに三句）から成り、上音を基調とし、拍子に合わない。イツセイとワカは「うたう」といわず「あげる」といふ。
- 7 出立して 底本「出立して」、明和本「出立して」。
- 8 指事 いまサシとよぶ謡。世阿弥の論書には「指声」といふ術語も出てくるが（『能作書』一六九頁参照）、同じくサシのことである。
- 9 出し物 底本「出し物」、明和本「節物」。明和本のは「賦物」の宛て字であろう。このほうが用例もあり（『風姿花伝』四八頁参照）、適切かもしれない。「出者」といふ語はあるが（『風姿花伝』四九頁と『能作書』一七〇頁）、それらは「でも」とよまれている。しばらく「出し物」と「出者」を同語と見て、底本に従つておく。
- 10 芸力も 底本「芸力も」、明和本「勢力」。
- 11 音声なども 底本「音声ふとも」、明和本「音曲等も」。
- 12 下座 歌舞伎の「下座」とちがひ、舞台上に坐っている者の意。
- 13 脇の為手 明和本の注に「わきのしてとハ、今いふ佐仕也」とあるが、本条では棟梁の為手ではない為手全体を意味しよう。
- 14 論義番ひの声先 底本「論義つかひ」。従来は「論義遣ひ」とよまれているが、論義を「つかふ」とは用例のない言いかたである。「つかふ」すなわち交わすことであらう。ロンギの謡で、ワキはシテがうたい切つてから自分の文句をうたい出すけれども、シテはワキの文句の末尾にすこしかぶせるようにうたい出す。それが「声先」である。

一、脇の為手の心得べき条々。まづ最初に出で、開口よりその題目の謂はれを分明に云ひ納めて、一会の事をなすこと、これ脇の為手の

一、ワキ方の心得について。まづ最初に舞台へ登場し、開口の祝言文句によって、その能の大筋の趣旨を明確にまとめて述べ、その日の能を成り立たせるのは、すなわちワキ一人の全責任であ

一人一心の芸役なり。ことさら、開口は当日の発端の句として、万見諸聞の祝言なれば、いかにもいかに、習道あるべし。それよりのちは、一座の平頭の俱行を本として、棟梁の掟の程拍子を、心中に案得して、俱行同心の曲風をなすべし。そもそも、脇の為手の心中に、殊別け心得べき道あり。棟梁の指南に従ふを以て、脇の為手とは名付けた。たとひ、棟梁の不足なりとも、それにつきて、力なき為手として一座を持つほどの主頭には、殊別け、脇の為手従ふべし。棟梁不足なればとて、脇の為手の上手、別心の曲をなさば、一座不同にして、能の順路あるべからず。よきにも従ひ、悪しきにも従ふを以て、脇の為手とす。これ第一の俱行なり。俱行なくは、能姿不異にあるべからず。この理をよくよく心得て、一座をなすを、脇の為手の道とは申すべきなり。

また、その外の脇の人数、一座の掟の曲風の、程拍子の詰め開きを、よくよく習道して、一同に心をなして、油断なく、平頭に曲をなすべし。これ、脇の人数の道なるべし。

る。殊に口切りは、その日の能の最初の文句として、皆が注目し傾聴する祝言だから、できるだけ研究しなくてはいけない。それ以後は、一座の役者の協調がうまく揃うことを根本として、リーダーたる役者の指示する緩急のぐあいをのみこんで、それとびつたり合った演技をしなければならぬ。いったい、脇役者としては、特に心得ていてほしい筋あいがある。それは、リーダーの指揮に従うものだからワキ方と名づけたのだという点である。だから、たとえ、リーダーが芸力不足であっても、それに対しても、やむを得ない事情で一座を主宰しなくてはならない立場にある親方には、特に、ワキ方は、随従してゆくべきだ。リーダーの芸力が不足だからといって、腕のあるワキ方が、勝手に腕を見せるといふようなことがあつては、一座の演技がちぐはぐになつて、能は順当に行くものではない。相手が巧ければこちらも巧く、拙ければ拙いようにつりあいを取るのが、ワキ方というものである。これが最上の協調である。協調がおこなわれなければ、演能はびたりと行くものではない。この道理をよく心得て、一座の能をうまくやつてゆくの、ワキ方の道といふべきである。

そうじて、能に立つ人数のこと、四五人には過ぎべからず。しかれば、昔は、為手あまたありしかども、二人などにてよかるべき能をば、一人してせしなり。人数あまたあればとて、大勢連座して、烏帽子・素襖のわたくし姿にて同音を謡ふこと、さらにさらに道にてあるべからず、まづ、大きに聊爾なることなり。この風体、近年見えたる作法なり。心得られぬことなり。

一般に、能舞台に出る人たちは、四五人以上になるのはよろしくない。それで、昔は、役者がたくさんいても、二人ぐらいで適当な能なら、一人か二人で演じたものだった。役者がだぶついているからといって、大勢の者がぞろぞろ坐り、烏帽子・素襖というふだんの姿で連吟するなどは、けつしてまともな行きかたでない。まあ、たいへん不都合な事といつてよい。こんなありさまは、近年になつて生じたやりかたであつて、賛成できないことである。

- 1 万見 底本「万見」明和本「万見」。
- 2 殊別け 特別に。明和本「事克」。
- 3 力なき やむをえない。『風姿花伝』(三七・一〇五)
- 4 殊別け 明和本「ことにく」。
- 5 不異に 底本「ふいに」、明和本「無為には」。
- 6 脇の人数 明和本の注に「其外の佐とは、属の事也」とある。
- 7 一同 明和本「一面」。
- 8 為手あまた 明和本の注に「爰に仕手とハ、属をするもの、事なり」とあるが、単に能役者の意とすべきであらう。

一、鼓の役人の心得べきこと。すでに打ち立てて、いまだ為手の一声・指事をも云ひ出ださぬまでは、我力なれば、何を一心の得手に任せて、声拍音力の手数を尽して囃し立つべし。

一、鼓方の心得るべきこと。打ち始めてから、まだシテがイッセイやサシをうたい出さない間は、自分たちだけの力量をふるつてよい所だから、何でも、思う存分に、掛け声も鼓を打つのも、秘術をつくして演奏するのがよろしい。さて、だんだん謡や型が

さて、次第々々、舞歌二曲・物まねに至りては、わたくしあるべからず。為手の心を受けて、二曲を博士にて、事をなすべし。これ、申樂鼓の道なるべし。太鼓なども、同じ心なるべし。およそ、何の太鼓なりとも、打ち立ては乱声なるべし。

一、笛の役者のこと。当座一会の序・破・急にわたりて、調感をなす一大事の曲役なり。申樂いまだ初まらぬ以前に、しばらく吹き鎮めて、初樂即座の当感をなす役なり。すでに舞歌に至りては、為手の音声聞き合はせて調感をなし、音声を彩どるべし。ここに笛の役者、第一心得べき道あり。そもそも笛と申すは、調子の器物なれば、笛を本とすべきことは非なけれども、一座の成就をなすべきこと、別の大事あり。楽人の笛などには変るべき故実あり。申樂笛の心とは、自然、為手の音声に、調子の少し上り下る甲乙あるべし。それに、笛を本なればとて、本調子のままに、心もなく吹き通らば、為手の音声と笛の調子と異なるべし。しからば、当座の音感、無興なるべし。さるほどに、ただ為

手の声の匂ひに依じて、少な少々と調子を心得て、調感を彩どれば、一座の調子違ふとは聞えず。ただ不異なる音感なるべし。また、為手の調子の少し上り下ること、これまたさのみ不足にてあるべからず。声明・早歌などだにも、少し調子の上り下りはあるものなり。申樂と申すは、一切の物まね、祝言・望憶・恋慕・哀傷・怒り・舞・動作など、此の音声さまざまなれば、覚えずして調子の上り下ることあるなり。笛吹きも、この道を心得て、為手の音に從ひて、この故実を以て、音を探りて、さて、舞歌の際のあらん所へ、本調子と念じ合はせて、人には知らせぬやうに、調感を繋ぐことこれ申樂の道なるべし。〔これ申樂のための笛なればなり。〕

詩序曰、
おさまるよこえは、安らしてめでたしめり
治世之音、安、以、樂、其、政、和。
みだれをよめば、うらみてもいかり、そのつらさをほろぼすなり
乱世之音、怨、以、怒、其、政、乖。

1 我力 底本「我力」、明和本「我力」。

出てきて、劇的所作も加わるようになってからは、自分だけの行きかたでやってはならない。シテの心持を受け取って、舞・謡を規準として演奏するべきである。これが申樂の鼓打ちの道である。太鼓を打つ者なども、同様の心がけを必要とする。およそ何の太鼓でも、打ち初めは乱声のようなものである。

一、笛方について。演能に際し、全曲の序・破・急にわたり、音曲の調子を定めてゆくという重大な役目をするのが、笛方である。能がまだ始まらない以前に、すこし吹いて座を鎮め、いよいよ始まるという際に観客をグイとひきつける役である。舞・謡が始まってからは、シテの調子をよく聴きわけ、それに合わせて伴奏せよ。さて、笛吹きの何よりも心得ていなければならぬ点がある。いったい笛というものは、音階を定める楽器であるから、謡が笛の調子を基とするのには言うまでもないが、その能をうまく成功させるためには、別の大切な点がある。すなわち、雅樂の楽人などの笛とは変わった吹きかたをしなければならぬという心得である。能の笛の心得とは、シテの音声には、何かのぐあい調子がすこしく上がったり下がったりする声の高低があるはずだ。それに、笛が基本だからといって、笛の正確な調子どおり何のほからいもなしに吹いてしまうと、役者の音声と笛の調子とは、くいちがってくるわけ。それでは、聞いたところの感じがおもしろくないものとならざるをえない。こんなわけだから、シテの声の

微妙なズレに依じて、すこしずつ調子に手心を加えて、その感じを調整するようにすれば、全体の調子が違つて聞えるということもなく、同じように感じさせるわけである。また、シテの調子が、いくらか高くなったり低くなったりすることも、シテとして大した欠陥となるものではない。声明や早歌などでも、すこしぐらい調子の高低することはあるものだ。申樂というものは、あらゆる種類の劇的所作をするわけで、祝言・望憶・恋慕・哀傷・怒り・舞・動作など、これらに依じての音声の使いかたは多種多様であるから、無意識のうちに、調子の高低が生ずることもある。笛方も、この道理をわきまえ、シテの音声に從つて、以上に述べた心得で、適切な調子を求め、そうして、舞・歌の切れ目があるような所へ、正確な調子を配慮し、観客にはさとられないようにして、調子の感じを繋いでゆくの、すなわち能の笛の心得である。〔これは、能のための笛方だからである。〕

『毛詩』の大序に、次のような句がある。
泰平の世の歌声は、安らかで樂しげな響きがある。これは、その世の政治が安定しているゆえである。また、乱れようとする世の歌声は、怨み怒っている響きがある。これは、その世の政治が正しく行なわれていないからである。〕

2 得手 底本「して」、明和本「えて」。明和本に從う。

3 声拍音力の手数を尽して 明和本はこの句なし。「声拍」は底本「せいひよう」。よくわからない語であるが、掛け声と打つことであるるか。

4 次第々々 明和本「次第に」。

5 博士 節博士すなわち音譜。この場合は、抛り所の意に用いる。

6 打ち立て 底本「うちたて」、明和本「打立」。

7 乱声 雅楽その他の催し物で、始めや終りに奏せられる楽。笛・鼓・太鼓などを用いる。定まった拍子が無い。明和本の注に「乱声なるべし」とは、前に何とも一心の得てに任せてはやしたつべしとあるのに同じく、大夫の舞歌を見聞せざる前は、各大夫の心を察するのみなるに

よて、乱声とは「云り」とある。打ちかたに拍子が無いのではなく、シテの謡をあらかじめ心に描きながら太鼓方が自分のイニシアティブで打つことを、乱声に譬えたのであろう。

8 器物 底本「器物」、明和本「器物」。

9 少し 底本「すこしき」、明和本「少し」。明和本に従う。

10 早歌 底本「さうか」、明和本「唱歌」。笛の唱歌としては意味が通じない。早歌すなわち宴曲であろう。

11 本調子と 明和本「本調子に」。

12 これ申楽の 以下「其政乖」まで底本なし。明和本により補う。出典は『五音曲』(三三九頁) 参照。

一、申楽は、物まねの気転によりて、万声に変わる音声なれば、調子のすこし上り下りあらんは、さらに為手の不足にはあるべからず。昔、大和申楽に、名生と申す笛の上手ありしなり。京極の道管入道殿(佐渡判官と云ふ)、「申楽の間延ぶるは悪きことなれども、この名生が笛を聞くほどは、時節の移るをも忘るるぞ」と、感ぜられたるほどの笛の堪能なり。ある時、神事申楽の当座にて、為手の棟梁と童と謡義を謡

一、申楽は、劇的所作の心組みが変わるに従い、その謡もいろいろ変じてゆくものであるから、調子がいくらか高低することがあっても、いっこう役者の欠陥とはならないものである。昔、大和申楽に、名生という笛の上手がいた。京極道管入道殿(佐渡判官とよばれる)が、「演能時間が長びくのはよくないが、この名生の笛を聞いているときは、時刻のたつのをすっかり忘れてしまふよ」と感心せられたほどの笛の名手であった。あるとき、神事能の際に、シテ役者と子方とでロンギを謡ったが、その時の基調は鸞鏡であった。子方の声はまだ幼声で、盤渉に寄って高調子にうたつ

ふ時、その時の調子鸞鏡なり。若声はいまだ童声にて、盤渉懸りに上りて行く。為手の声は鸞鏡なり。それに数々の論義を謡ふほどに、兩人の調子不同にして、無興になるべかりしを、かの名生、笛の調子をば、本よりの鸞鏡に吹きながら、若声の方をば、調子を少し心して、盤渉懸りに彩どり、為手の方をば本調子の鸞鏡に吹きて、互ひの音曲不異に聞えて、当座も面白かりき。さるほどに、かやうに吹くとは、一座に聞き知る人もなかりしを、その為手、のちに名生に向つて、「今日の笛、ことにことに神変にて候ひつるなり」と褒美したりし時、名生申すやう、「聞き出だされまらせられたれば申すなり。老声若音の論義の調子の故実、随分仕立て候ふなり」と申したりき。これは、しかしながら、老若の調子を変へて、彩どりたるゆゑに、老若の調子一音に連曲して、不異音文に成就しぬ。これすなはち、治まれる世の声に相当して、安く楽しむ声立てやあらん。しかれば、如此古の役者の上手は、ただ一座の為手の感を本として、即座一興の成就をなししこと、当代ま

てゆくし、シテの声は鸞鏡である。それで、だんだんロンギの文句を謡い進めてゆくものだから、二人の調子が不揃いで、感心できない出来になる所だったのを、例の名生が、笛の調子を本来の鸞鏡に吹きながら、子方の謡のほうを、調子をすこし加減して盤渉ふうにあしらい、シテの謡を本調子の鸞鏡に吹いたので、両者の謡が同じ調子に聞えて、その場の感じはたいへんおもしろいものであった。ところで、このような吹きかたをしたとは、一座のなかで聞きわける人も無かつたのだが、そのシテが、演能後、名生にむかつて、「今日の笛は、ほんとうに神わざともいうべき至芸でした」と激賞したところ、名生が言うには、「聞きわけてくださつたから申しますが、お年を召した声と子ども声とで謡うロンギの調子の工夫は、ずいぶん苦心してやったものです」と述べた。これは、まったく、老声と若音とに対する調子をかえてあしらつたので、老若の調子がひとつに揃つて、同じように聞える妙技を成功させたのである。これすなわち、泰平の世の声というものに相当し、安らかに楽しむふうの声づかいでもあろう。さすれば、こんなふうに、昔の上手な楽師は、ひたすら一座の役者の氣持を規準として、その場その場のおもしろみを出すことに成功したもので、これは、現在に至るまでも模範とすべきでなからうか。『毛詩』の大序に、「泰平の世の歌声は、安らからで楽しげな響きがある」とある。

での手本ならずや。詩序に云はく、「治世之音、安以樂」。

- 1 氣転 氣の持ちかたが変わること。現代語の「氣転」とは同じではない。三四〇頁注2参照。
- 2 京極の道誓 本名佐々木高氏。室町幕府の評定衆、政所引付頭。四条京極に住む。道誓は法号。武將として有名であったが、連歌・茶などにも造詣が深かった(『太平記』卷三十二「山名右衛門佐為敵事」。応安六年(一三七三)八月二十七日没、六十八歳。時に世阿弥は十一歳。
- 3 佐渡判官と云ふ 明和本この注なし。
- 4 棟梁と童 棟梁は観阿弥、童は世阿弥(当時は藤若といった)。「習道書」に、種々の定あれば、委細書き置かず。笛の事につき、年より・童とあるは、観阿・世阿なり(『甲樂談儀』)。
- 5 論義 問答体の話。いまもロンギという。能「橋弁」

一、狂言の役人のこと。これまた、狂言の手立て、あるいは座敷しく、または昔物語などの、一興あることを、本本に取りなして事をす、如此。また、真の能の道やりをなすこと、

- 6 鸞鏡 だいたい洋楽のA井に当たる。
- 7 盤渉 だいたい洋楽のBに当たる。
- 8 随分仕立て 底本「すいぶん仕立」、明和本「随分得て」。
- 9 申したりき この名生の条が基本的に経験回想の助動詞「き」で叙述されていることに注意。
- 10 しかしながら 「完全に」「すっかり」等の意。現代語の用法とは違う。
- 11 しかれば 底本「然は」、明和本「然れば」。
- 12 なししこと 底本「なして」、明和本「なしし事」。明和本に従う。
- 13 詩序に 以下「安以樂」まで、明和本なし。

一、狂言方について。これはまた、狂言の手段として、あるいは当座のはなし、あるいは昔物語などの、興味あるものを素材として演じてゆくことは、誰も知っているとおりである。また、能に加わってつなぎの役をする場合には、観客を笑わせようという

笑はせんと思ふ宛てがひは、まづあるべからず。ただ、その理を弁じて、嚴重の道理を一座に云ひ聞かするを以て道とす。そもそも、狂言とは、必らず数人の笑ひどめくこと、俗なる風体なるべし。笑みの内に楽しみを含むと云ふ、これは面白くうれしき感心なり。この心に和合して、見所人の笑みをなし、一興を催はさば、面白く、幽玄の上階の狂言なるべし。これ狂言の上手と云へり。昔の槌太夫が狂言、この位風なりしなり。それにつけても、数人愛憐の愛嬌を持ちたらん生得は、芸人の冥加なるべし。言葉・風体にも、俗なることをなさずして、貴所・上方様の御耳に近からん利口・狂談を嗜むべし。かへすがへす、狂言なればとて、さのみに卑しき言葉・風体、ゆめゆめあるべからず。心得べし。

- 1 狂言 底本は「狂言」だが、明和本は「俳」。下に「をかしの手立て」「そもそもをかし」とある点から考へ、底本は「狂言」と書いて「をかし」とよませたものであろう。

当てこみは、まず遠慮しなくてはならない。ひたすらその能の筋を説き、きっぱりとした筋道を観客に言い聞かせるのが、その役目である。いったい、狂言というものは、いつも観客が笑いどめくようなのは、俗っぽい演技と称すべきである。「笑のうちに楽しみを含む」ということばがあるが、それは、おもしろく愉しい感じである。観客のこうした心持によく融けこみ、皆が微笑して楽しむというふうであれば、それは、おもしろく優美な高級の狂言師といつてよいであろう。こんなのを狂言の名手というのである。昔の槌太夫の狂言は、この位に達した芸であった。それに付けても、観客に好感をもたれるような愛嬌を、生まれつき身に備えているのは、芸人として有難い限りだろう。セリフにおいても、しぐさにおいても、卑俗なことをやらす、上流有識のお方たちにお聞かせしても不都合でないような洒落や軽口を心がけるべきである。くれぐれも、いくら狂言だからといっても、あまり下品なセリフやしぐさは、けつして出してはならない。よく注意するがよい。

- 2 狂言 底本・明和本「をかし」。
- 3 座敷しく 底本「さしきしく」、明和本「さきき」(傍注「此間虫喰テミエズ」。従来は「座敷し」という形容詞の連用形に解する説が行なわれているけれども(能勢

説・川瀬説、落ち着かない。あるいは「座敷ごと」の誤写で、世間話の意であるうか。それならば「昔物語」と対する。訳文はそのように試解しておいた。

- 4 厳重 底本「けんてう」、明和本「見聴」。従来は「観客が見たり聴いたりする」の意に解されているが、如何。中世話の「厳重」(vivi)の意で解したい。『花鏡』(二二五頁注3)参照。

- 5 狂言 底本・明和本「をかし」。
- 6 俗なる 底本「職なる」、明和本「感なる」。
- 7 見所人 底本「見所人」、明和本「見所人」。
- 8 幽玄の上階の 底本「ゆうけむの上かいの」、明和本

一、申樂の番数のこと。昔は四五番には過ぎず。いまでも、神事・勸進などには、真の能の申樂三番、狂言二番、以上五番なり。近年、貴所様にて仕つることは、ことの外に番数を尽して、七八番、十番など、貴命にて仕つること、わたくしならず。しかれば、能の序破急のこと、脇能は序なり。二番・三番・四番は破にて、事を尽して、五番目は急にて果てて、序破急納まりて、遊樂成就の一会なるに、思はざるに番数重なれば、序破急また改まりて、曲道も前後する

一、演能の曲数について。昔は四曲か五曲以上になることはなかつた。いまでも、神事能や勸進能などでは、本格能の申樂三曲と狂言二曲で、合計五曲である。ところが、近年、上流の御邸でさせていただく能は、むやみと曲数を多くして、七八曲あるいは十曲なども、お好みによつてするが、こちらの勝手ではない。そこで、能組みの序破急としては、初番能が序で、二番・三番・四番は破で、この破において満足のゆくようたつぷり演じ、五番目は急としてまとめ、このようにして序破急がうまく整つて、まとまりのよい演能が成立するのであるが、予定以外に曲数が重なること、序破急がまたやり直しになり、曲の順序も前後いれちがうような

風体なり。かへすがへす、芸人のため一大事なり。しかれども、貴命なれば、力なき次第。これにつけても、一座心得て、破・急にかかる所を休息して、手を惜しみ、曲を控へて、能の風体、品々の奥を残す手立てを案得すべし。堪能・達人の芸力、この時頭はるべきか。よくよく、かねての公案を以て、能の序破急を延曲すべし。

申樂一会の習道、如此。
永享二年三月 日 為三座中連人一書。

- 1 申樂 この場合は、いまいう能と狂言を含めたもの。
- 2 真の能の申樂 いまいう能に当たる。
- 3 能の序破急 『花鏡』(二〇二頁以下)参照。
- 4 序破急また 明和本「序破急」なし。
- 5 曲道も 明和本「曲道にも」。
- 6 力なき次第 明和本「力なき次第也」。
- 7 一座 明和本「一座を」。

「幽玄をしる意の」。

- 9 狂言 底本・明和本「をかし」。
- 10 狂言 底本「をかし」、明和本「を古事」。明和本は誤写と認められる。
- 11 榎太夫 観世座づきの狂言方。『甲樂談儀』に「大榎」と「後の榎」が見える。「昔の」とあるから、大榎(観阿弥時代)をさすのであろう。
- 12 狂言 底本「きうけん」、明和本「きやうげん」。役者としての狂言方は「をかし」、芸としての狂言は「きやうげん」と言い分けている。
- 13 俗なる 底本「職なる」、明和本「賤なる」。

状態である。これは、演者側にとつては、まったく容易ならぬ事態であるが、お好みによることだから、どうしようもない成り行きである。これにつけても、技芸者一同はよく注意して、破の段から急へうつるあたりの所で、ゆっくり運び、おもしろい芸をあまり出さないようにして、曲折をひかえめにして、能のやりかたに、いろいろ余地を残しておくような手段を講ずる必要がある。名手・達人といわれる技芸者の実力は、こういった困難な際にあられるだろう。あらかじめよくよく工夫をこらしておき、能の序破急を、適当に加減するようにせよ。

当日の演能に関する心得、以上のとおり。

永享二年(一四三〇)三月某日 わが座の技芸者たちのためにこれを記す。

- 8 休息して 明和本の注に「爰に休息とは、緩くなる事也」とある。
- 9 延曲すべし 明和本の注に「延曲すべしとは、是破の間を長くする手だてをいへり」とある。
- 10 永享二年三月日 明和本「永享二庚戌三月九日世阿」。
- 11 為三座中連人一書 明和本は「永享……」の前行に一字下げて記し、「書」が「云」となっている。